

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史
第一二号 二〇一七年二月 三五―六九頁
南山アーカイブズ

建築家の生涯とキャンパス建築という大仕事

―アントニン・レーモンドにとっての

南山大学山里キャンパス―

木方十根

鹿児島大学学術研究院理工学域建築学専攻

An architect's life-long search and a campus design as his
accomplishment.
―Antonin Raymond's Nanzan University Yamazato Campus―

Department of Architecture and Architectural Engineering,
Graduate School of Science and Engineering,
Kagoshima University

KIKATA Junne

Archeia: Documents, Information and History
No.12 November, 2017 pp.35-69
Nanzan Archives

はじめに

建築家、アントニン・レーモンドの生涯

クラドノからニュー・ヨークへ

フランク・ロイド・ライトとの出会いと帝国ホテル

関東大震災と戦前日本での活躍

離日、第二次世界大戦

戦後日本の再建

建築家の集大成

南山大学キャンパスの特徴 — 比較考察から —

建築家の生涯とキャンパス建築という大仕事

—アントニン・レーモンドにとつての南山大学山里キャンパス—

木方十根

はじめに

皆さん、こんばんは。今日はお足元の悪い中お集まりいただきまして、ありがとうございます。また、南山アーカイブズ様には、私をわざわざ鹿児島からお招きいただき、本当に光栄なことでございます。今日はよろしくお願いたします。

ちよつと自己紹介に補足をしなければいけません。なぜ鹿児島大学の者が南山の話をするのかと思われるでしょうが、実は私は名古屋の出身で、伊勝小学校、川名中学校の卒業生です。ですからほぼ毎日、通学のとくに南山大学のキャンパス辺り、今の体育センターのプールの向こうの坂道、を上り下りしていたのです。中学ぐらいになると、たまには真つすぐ家に帰るのも嫌だったりすることもあるんですね。そうすると南山大学のキャンパスの中でラグビー部の練習を見たり、テニス部の練習を見たりということと時間を使わせていただきました。そういう意味



写真1 南山大学山里キャンパスの広場

でここは本当に古里のようなところなのです。

私は所属に示されていますとおり、今は鹿児島大学で建築を教えております。建築の設計とか歴史のことを幅広く、地方大学では、あまり専門にこだわってもらえないので一応何でも学生に教えているのですが、そのように建築を志すことになったきっかけも、南山大学のキャンパスの建築を見て「ああ、こういうものを造れたらいいな」と思ったことにあります。専門家としての私を育てていただいたのも南山大学のキャンパスであり、そういった意味でも、かねてから常に関心を持っていたところです。

私はその後、名古屋大学に進学し建築を勉強しました。さらには助手として名古屋大学に勤めながら、南山大学との比較も念頭に、キャンパスの建築を計画したり、研究しておりました。その後、鹿児島大学に転任しましたが、とある機会に、今そちらに回覧されています海外の本に、日本の大学のキャンパス、特にモダニズムの時代のキャンパスについて書いてくれないかというお話をいただきました。そのさいアーカイブズの永井先生など南山大学の皆様にもお世話になりました。いろいろ資料もご提供いただきました。そんなご縁で、今日こちらに立たせているという次第です。

これは昨日の写真です（写真1）。南山大学といえばこの風景、本当に素晴らしい空間だと思います。建物もさることながら、樹木や芝生のオープンスペースがあって、そこに日陰ができて、学生さんが語らえるような場所、



写真2 キャンパス全景

非常に豊かな場所があるということ、私も小さいころから、本当にいいところだなと思っておりました。

もう一つ印象深かったのは、神言神学院の建築です。とてもユニークな形で、子どもころ鐘塔は銅鐸みたいな形だなど思っていました。会堂部はババロアかプリンみたいな形をしていますので、いつも気になっていましたが、クリスマスなどの機会に中に入れていただくと、非常に荘厳な、厳肅な空間があることに大変感動したものです。

神学院のある丘のてっぺんから見ると、南山大学のキャンパス越しにずっと名古屋の中心市街地が見えて、キャンパスの建物は木々と一緒になって、ひとつの町をつくっているようです。本当によくできたキャンパスだと思います（写真2）。

建築家、アントニン・レーモンドの生涯

今日は、その南山大学のキャンパス、あるいは神言神学院の建物を設計したアントニン・レーモンドという建築家に光を当ててお話をしたいと思います。後半には、名古屋にある他の同時代のキャンパスと比べながら、南山大学のキャンパスの特徴をあぶり出してみたいと思っています。主には前半の「建築家の生涯と」というところについて、今日はお話をしたいと思います。

もちろん、皆さん、アントニン・レーモンドという名前はお聞きになっていると思います。チェコ生まれのアメリカ人建築家で、日本のモダニズ

ムの建築をリードした重要な建築家の一人として名前を知られています。

実際には、彼の生涯は非常に波乱万丈でした。レーモンドの建築を紹介した専門書、さらにはレーモンドその人について書かれた本も出ていますが、実際にどのような生涯だったのかということについては、なかなか奥深いものがあります。

今日はそのような、彼自身が歩んできた人生をまず振り返ります。彼の建築家としての歩みというのは、ある意味、一筋縄ではないというか、決して彼は、最初からあるポリシーを持っていて、最終的に南山大学の建築を造ったというわけではなくて、その間に、ありとあらゆるデザインの思想といったものを吸収しながら、咀嚼しながら成長してきたといえます。

それもそのはず、彼は一八八八年と、一九世紀末の生まれですから、彼が生まれたころには、そもそもモダニズムの建築はまだ確立していなかったのです。むしろ彼が一生を通じて建築を造っている期間こそが、世界のモダニズム建築の歩みそのものであるわけです。そういう点では、彼自身がいろいろな思想を咀嚼したり理解したりする過程は、彼にユニークな部分もあるのですが、世界の建築の動向そのものを反映しているということでもあります。歴史的な意味で彼は非常に貴重な存在、その時代にチェコで生まれてアメリカに来て日本に来てという、彼の人生のあり方そのものが非常に興味深い考察の対象なのです。

レーモンドは日本でたくさん作品を造りましたので、まず日本で名を知られてきたのですが、最近ではアメリカやフランスなどでも随分注目されています。例えば、これは二〇〇六年にアメリカで出版された本²⁾で、アントニン・レーモンドとノエミという奥さまのことについて書かれたモノグラフ、こういった大著が出たりしています。レーモンドの資料は、アメリカのペンシルベニア大学の建築学部にとまって寄託されていて、そちらできちんと

整理されています。そういう背景もあって、レーモンドは国際的にも注目される存在になっています。

クラドノからニュー・ヨークへ

彼は一八八八年五月、旧オーストリア＝ハンガリー帝国のボヘミア王国にあります、クラドノという町で生まれました。両親はアロイ・レイマン、ルジーナ・レイマンといえます。後には「レーモンド」と言っていますが、本来は「レイマン」というチェコ語の名前です。

最近の研究書を見ていますと、当時の彼の位置付けが調査されています。彼はボヘミアの政府には「チェコ語を話すユダヤ人」と位置付けられていたようです。お母さんはカトリックのチェコ人だったのですが、お父さんがドイツ系ユダヤ人ということもあって、本人は「ユダヤ人」という位置付けにありました。大学の入学関係の書類などにも、やはりそのように記されていたということです。そういう出自だったことは、その後の彼の人生を考える上では避けて通れないことになります。

これがクラドノという彼の生まれた町の町並みです。見てのとおり、古い建物やモニュメントがあるような町ですが、ここには鉄鋼の会社があったり、炭鉱も近くにあって、チェコの中でも産業地域として、ドイツやハンガリーなどから目を付けられているような場所でした。そういうところに彼は生まれてきたのです。

彼の自伝を見ると、母方の在所の、のんびりした農家の思い出などが書いてあったりしますが、実際には、父親はドイツ系のビジネスマンで、彼が育った環境は必ずしもそういう感じではありませんでした。クラドノは一八三〇年代ぐらいから鉄鋼業で栄えてきた町ということもあって、旧市街の真ん中には、一九世紀に建てられた

建築物が建っていたようです。こちらは教会堂でネオ・ゴシック様式の建築です。こちらの建物は市庁舎ですが、これは折衷主義、ルネサンスなどの建築様式に、バナキユラーな地元の様式が混ざった建築です。こういう装飾が豊かな、いかにも一九世紀らしい建築が新しく建った町で彼は育ったのです。

彼は六人兄弟の中の一人でした。さきにお話した、ユダヤ系であるということとの関係でいえば、彼自身の自伝を見ると、お姉さんのイルマは娘と共にポーランドの収容所に入れられて、それから後は消息が分からないとか、弟のビクターは、早くにアメリカに出るわけですが、その後スウェーデンに逃げようとしたところを殺されてしまったとか、弟のエゴンは土木技術者だったようですが、ユダヤ人をかくまった罪で銃殺されたといったことが書かれています。こちらのフランクはオーストリア＝ハンガリーの軍に帰属していたようですが、家族は悲惨な目に遭ってきたようです。第一次世界大戦後、彼は人生の中で最後にプラハに立ち寄ったことがあって、そこで一度家族に会ったのですが、その後はそういった形で家族と会うことが全くなくなってしまったようです。そういう境遇の中で、彼はアメリカと日本を往復しながら建築を造ってきたのです。

先にお話したとおり、クラドノという町は産業都市ということもあって、いろいろな労働運動が起こったり、また、オーストリア＝ハンガリー帝国の下にありましたので、鉄鋼業にしてもオーストリアの資本が入ってきていたなか、それに対してチエコという国のアイデンティティーを求めていくような民族運動も盛んだったりと、随分と騒々しいというか、きな臭い雰囲気なかで子ども時代を過ごしてきたということも、自伝には書かれていません。そのなかで彼は建築を志すわけです。最初はクラドノの工科学校に進むのですが、もっと勉強したいということで、後のプラハ工科大学になる、高等工業学校に入ります。これはその学生のころのレーモンドの写真です。

彼はその後、一九一〇年にアメリカに移るわけですが、ちょうどこのころのプラハというのは、建築の歴史上ち

よっと面白いところだったといえます。建築史あるいは美術史でいうところのチェコ・キュビズムという、建築デザインの流れ、グループがありまして、このプラハ工科大学などを中心にして、ちょうどレーモンドよりも少し上の世代の人たちがそれを動かしていたのです。ただ実際には、レーモンドは、例えばヤン・コチエラ (Jan Kotěra, 一八七二～一九二二) やヨーゼフ・ホホル (Josef Chochol, 一八八〇～一九五六) といったチェコ・キュビズムの代表的建築家が活躍するよりも前に、アメリカに出てしまいました。チェコ・キュビズムとは、例えばこのような住宅、幾何学的な結晶のような形をしていて、角度を変えて見ると建築の見え方が変わるような表現。ちょうどピカソなどの絵画はそうですが、立体的な視覚的效果を強調したような、新しいデザインを見つけていこうという動きでして、一九一〇年代初頭にプラハを中心起こっています。このように、プラハの町では、チェコならではの建築が模索されていくわけです。なお建築のモダニズムの歴史においては、オーストリアのウィーンは非常に重要な位置を占めています。ウィーン・ゼツェションといいますが、過去の建築様式から分離して新しい建築様式をつくるという動きがこちらでも起きていましたが、プラハでは、それに対するチェコらしさということを考えて、このような動きが起きてきたともいえます。ちょうどそのようなところにレーモンドは学生であり、身の回りにそういう建築家たちが育ちつつあったわけです。

なのですが、彼は必ずしもプラハ工科大学の教育に満足ではなかった、と書いています。先ほどクラドノの市街地の写真をお見せしたときに「折衷主義」という言葉を使いましたが、過去の歴史的な様式、ゴシックとカルネサンスなどの様式に、地元の風土的なチェコらしい建築様式とを混ぜた装飾様式の建築を造るシュルツ教授 (Joseph Schulz, 一八四〇～一九一七) という人がいたり、あるいは伝統的建築の再発見を掲げたコウラ教授 (Jan Koula, 一八五五～一九一九) という、民家などを一所懸命研究しているような先生がいたり、必ずしも彼が薄々と感じ

ていた次世代の建築を指向するような教育体制ではなかった、と書いています。

ただし彼が学んだのは芸術学校ではなく工科大学であり、一方でさまざまな建築の技術教育を彼はしっかりと受けただけで、それが後のキャリアの基礎になっていきます。これは彼にとつて非常に良いこと、特にモダニズムの建築を今後造っていく上では非常に重要なことでした。最後にお話ししますが、彼が標榜してきた、シンプルな建築であるとか、無駄のない建築であるとか、そういうことを考えていく上では、こういった技術教育をしっかり基礎として身に付けたということは、大きな糧になったと考えられます。

さて同郷の建築家がそういう新しい動きを模索しているなか、彼は早々と、一九一〇年に国を去ります。先行研究を見ますと、義理のお母さんとの関係が少し悪くなつて、いづらくなつたとか、いろいろな背景があつたのとですが、結局、彼は「決意」の離国をします。トリエステの港から船に乗つてアメリカに出ていくわけです。この決意、括弧付きで書いたのですが、というのは、彼は学友会の役員をやつていたらしいのですが、どうやらここで積み立てていた奨学金を持ち逃げしたらしいのです。既往研究によると、状況的にどうもそういうことだったのでいいのです。渡航費もないが、このままチェコにいても、明るい将来が見えないという雰囲気を感じていたのでしよう。彼はそういうことでアメリカに来たらしいです。あるいは、そのぐらい覚悟をしていたともいえるでしょう。決して褒められることではなかったと思いますが、そうした行動をしてまでアメリカに、祖国を捨てるつもりで出ていったというのが、彼のアメリカ行きではなかつたでしょうか。

もう一つには、フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright, 一八六七―一九五九) というアメリカ人建築家に彼は憧れていたと言っています。一九一〇年ごろにフランク・ロイド・ライトの作品集が出版され、チェコでも、ベルリンで出版されたドイツ語版が出回りました。レーモンドそれを見て随分感銘を受けたと書いていますので、

そのこともあって、「やはり僕はアメリカで生きていくのだ」と決めたのだと思います。

ですが、最初からフランク・ロイド・ライトのところに行けたわけではありません。渡航費すら、罪を犯しながら工面して出ていったわけでして、ニュー・ヨークに着いたからといって、そこで何か特別な人脈があったわけでもないし、最初は日雇い労働のような形でしのがざるを得なかったわけです。とはいってもチェコ人のネットワークはニュー・ヨークにもありまして、そこを頼って彼は、キャス・ギルバート (Cass Gilbert, 一八五九—一九三四) という建築家の事務所に潜り込むことに成功します。

この真ん中にある背の低い方がキャス・ギルバートです。周りは全部スタッフに当たるわけですが、これだけの人数のいる大きな事務所です。キャス・ギルバートという人は結構有名な建築家で、最も知られている作品は、ウィルワース・ビルという、今もロウアー・マンハッタンに建つ高層ビルです。鉄骨造で、これが建った当時は、これが一番高いと言われていた建築です。その他にもたくさん、いろいろな建築を造っています。この建築は、クローズアップで写真を見せると、こんな形の建築です。中身は完全なる鉄骨造で、新しい二〇世紀 (一九一三年) の建築なのですが、外観は見てのとおりネオ・ゴシックの、例えばロンドンのビッグ・ベンとか、ああいう建築と同じようなディテールを持っています。

アメリカの高層ビルの歴史はシカゴで始まりました。シカゴでは鉄骨造の高層建築という、新しい素材や条件に即したデザインを追究した、シカゴ派と言われるグループが新しい建築デザインを模索していました。その流れに、後々レーモンドが師事することになるフランク・ロイド・ライトもいたのです。これに対してニュー・ヨークというのは、どちらかというとヨーロッパを向いているところがありました。アメリカでも特に東海岸の建築家は皆フランスに留学して、エコール・デ・ボザールで様式建築を学んで帰ってきたりしていたこともあって、やはりまだ、

正統的なデザインで建物を建てるべきだという風潮があつたわけです。こういう高層ビルも、せっかく建てるならネオ・ゴシック様式の鐘塔のようなディテールで造るほうがいいのではないかと、モダニズム的な歴史観で言えば、シカゴに比べ古くさい建築を造つていたわけです。そういう建築を、かなり細かい裝飾まで描き込んで造るような設計事務所がキャス・ギルバートの事務所だったので。このような大きな図面を広げて、原寸大のディテールを描いているようなところです。これはまさに先ほどのウルワース・ビルのための詳細図ですが、ここに潜り込んで、このような仕事を一生懸命やつていたわけです。

キャス・ギルバートにしてみれば、ヨーロッパでちゃんと勉強して、絵の描けるレーモンドのような人が来てくれれば大助かり。猫の手も借りたいような状況だったでしょうから、どんどん描いてくれということ、このようなディテールをひたすら描かせていたわけです。しかしレーモンドに言わせれば、そういう様式主義とか折衷主義的な建築が嫌でプラハを出てきたわけですから、憧れのアメリカでこういうことをやろうとは全然思っていないなかつたとなります。彼は自伝では、ボザール流の様式主義の雑用に忙殺されて、焦燥の四年間、本当にこれでいいのだろうかと思ひながらニュー・ヨークにいたと書いています。しかしキャス・ギルバート事務所は名の通つた事務所でしたので、例えばヒュー・フェリス (Hugh Ferriss, 一八八九—一九六二) という建築家—正確には建築のドロ잉を描くレンダラー、設計するといふよりは建築の図面を描く画家—のような人がいました。彼も有名な人で、一九一六年にできたニュー・ヨークのゾーニング法という法律、いわゆる高さ制限、斜線制限のようなものですが、その法律どおりに造ると、もうそれで未来の都市景観が決まってしまうのではないかと、このような空想建築を描いたり、これが結構インパクトがあつたわけですが、こういう面白い才能を持った人もいました。フェリスはレーモンドと非常に仲良くなつて、レーモンドの結婚式のときにも、二人を見守る重要な知人として彼らの

門出を祝ったりしたようです。またキャス・ギルバートの事務所は、先ほどのような派手派手しい建築だけではなく、地味な産業建築も設計していて、レーモンドは、例えばこういう倉庫を造るときに鉄筋コンクリートの実践的技術を学んだり、当然、高層ビルでは鉄骨造の構造を学んだりということで、建築技術の面では、アメリカという国で、非常に新しい、大規模な建築を手掛ける絶好の機会を得ていたわけです。

とはいえ、彼は、フランク・ロイド・ライトに憧れて来たということもあるので、四年間働いたのち、一度ヨーロッパを旅行して、リフレッシュしてもう一度建築を考え直そうということで旅に出ます。ポルトガルから入って、スペインから地中海を通ってイタリアに行くというような、いわゆるグラランド・ツアーをやるわけです。

その帰りの船で運命的な出会い、奥さんになりますノエミ・ペルネサンというフランス人の方との出会いがありました。彼女はどのように自画像を描いたりしていますが、グラフィック・デザインなどを手掛けた人です。「アントニン・レーモンド」と、われわれは彼らの業績を語るときにどうしても建築家の彼から言いますが、実際には、後のノエミ・レーモンド、奥さんの貢献も非常に大きいのです。南山大学でも家具とか装飾とか、建物の色の選択といった部分で、彼女がかなり大きく貢献しています。今は南山大学のトレードマークになっています朱い壁も、ノエミがアドバイスをしたということが知られています。そういう意味でも、単なる人生のパートナーということにとどまらない、仕事上のパートナーとしても非常に大きな存在を、このヨーロッパ旅行でアントニン・レーモンドは見つけることになります。

フランク・ロイド・ライトとの出会いと帝国ホテル

その後アメリカに帰って、しばらくまたキャス・ギルバートのところで働くのですが、意を決して、フランク・ロイド・ライトのところに足を伸ばします。念のため紹介させていただきますと、フランク・ロイド・ライトはアメリカの建築家で、シカゴを中心に活躍しました。初期には「プレーリー・スタイル」と言われる、左右非対称で平たく、連続的な空間を持つような、当時のヨーロッパの四角く左右対称のキュービクな建築とは全く違う建築を造るということで、世界の建築に大きく影響を与えた人です。ご存じの方も多いいと思いますが、ある種のオリエンタリズムもあったのでしょうか、フランク・ロイド・ライトは日本に高い関心を持っていて、例えばシカゴ万博で見た平等院鳳凰堂をモデルとした建築に感化を受けて、写真のような家を造っています。見てのとおり、水平な線が非常に強調されています。スケール感も非常に面白いです。フランク・ロイド・ライトの建築を実際に訪ねたことがある方はお分かりだと思えますが―ここに写っています、これがテーブルの大きさです。ということ、は、人間、アメリカ人が立つと、もうこれぐらいの背の高さだと思えます。そうすると、もうほとんど天井に頭が付きそうなくらいですが―このようにフランク・ロイド・ライトの建築は非常に小さいのです。装飾が濃密なので大きく構えているように見えますが、そういう人間的なスケール感を非常に大事にする、変わった建築家といえれば変わった建築家ですが、レーモンドはそういう彼に憧れてアメリカに来たのです。

そのころフランク・ロイド・ライトはどこにいたかというと、ウイスコンシン州の人里離れたところに、タリアセンという、事務所と家屋を造って弟子を住まわせて、農園をやりながら設計をやるような生活をしていました。そのタリアセンに、レーモンド夫妻はニュー・ヨークから訪ねていきました。その時の、アントニンとノエミが馬

に乗っている写真が残っています。

そのころ、タリアセンのアトリエ拡張計画もあり、早速手伝ってくれということ、二人は絵を描いて手伝います。これを見てフランク・ロイド・ライトは、なかなか役に立つ、使える人間だということを認識します。その他にもフランク・ロイド・ライトが設計していた建て売り住宅のパンフレットのドローイングなどをレーモンドが描いて、フランク・ロイド・ライトの信用を得ていくわけです。

レーモンドはその後、直接すぐにフランク・ロイド・ライトの事務所に入ったわけではなくて、兵役があつて、いったんヨーロッパに戻ります。ちょうどフランク・ロイド・ライトの事務所に行くころに、彼はアメリカの市民権を得て正式にアメリカ人になるわけですが、そういったタイミンングでもあつて、兵役を拒否することはできず、通信兵、情報員としてヨーロッパに行つて活躍します。そこから帰つてきて、いよいよフランク・ロイド・ライトの事務所に入ります。

そのときに、日本で帝国ホテルの建物を建てる契約を得たということで、日本に行つてくれないかということになります。レーモンドはそれを受けて、フランク・ロイド・ライトと一緒に日本に来て、ホテルの設計に携わります。明治村でフランク・ロイド・ライトの帝国ホテルの玄関部分をご覧になった方もいると思います。先ほど言いましたとおり、人間がこの大きさなので、フランク・ロイド・ライトらしいスケール感というのがこの建物によっても分かると思いますが、これを建てるにレーモンドは日本に来たわけです。

ちょうどヨーロッパからアメリカに帰り、息をつくまもなく日本に行くころの、横浜に向かう船の上での二人の写真です。このようにして、いよいよ日本にやってきました。

帝国ホテルとは、明治政府がいろいろ外国の要人を招く上で西洋風のホテルがあるということ、一八九〇年建

設されたホテルで、当初はご覧のとおりのネオ・ルネサンス風様式の建築でした。これが一九一九年に出火があつて燃えてしまい、これを建て直そうということで、フランク・ロイド・ライトのところに契約が行くわけです。

船に乗って一九一九年末、レーモンドは日本に着きます。諏訪丸で横浜港に着いたのは一九一九年の大みそか。日本人は門松を造つたり、お正月の準備をしていた。年越しのためのお祭り騒ぎや正月の準備の様子というものに、日本に着いて初めて触れるわけですが、レーモンドはそれにいたく感動しています。こういう祝い事や行事について努力できる人々というのは非常に文化的だということの後から回想しています。

その後、レーモンドは早速仕事に取り掛かり、例えばこういう透視図などをフランク・ロイド・ライトのために一生懸命描きます。その後、フランク・ロイド・ライトは要点を打ち合わせしてアメリカに帰るわけですが、レーモンドは帰らずに現場の責任者として残り、最終的にホテルができるまで関わります。これは内部です。もう今は失われてしまっていますが、このように大谷石の装飾が内部にずっとありまして、非常に手の込んだ建築だったようです。こういう装飾が非常に多用された建築を、後にレーモンド本人は、あまり好んでいないと言っています。彼は一生懸命設計しました。奥さんのノエミも、これにはかなり関与しています。帝国ホテルの「孔雀の間」という有名な部屋の、ちょうどこの部分にある孔雀の模様の原因はノエミが描いたものですが、これが少しアレنجジされて実際の建築にも使われているということです。当時レーモンドが残している写真を見ますと、例えば帝国ホテルで使われた大谷石の採掘現場の様子とか、現場の鳶とか職人さんが働いている様子を、非常に高い関心を持って見ていたようです。後にレーモンドが日本のそういう職人技としての建築に非常に深く関心を持っていくきっかけになっています。現場で精を出して働く職人さんの姿をスケッチしたりしています。単にフランク・ロイド・ライトの建築を実現するだけではなくて、日本の建築文化というものに、だんだん目を見開いていくことになるわけ

です。

同時に、帝国ホテルの仕事ですので、当然、各界の著名人あるいは有力者と、いろいろな機会を介して知り合いになっていきます。皇居の園遊会にも招かれたりして、だんだん日本の上流階級にもレーモンドの顔が知れていくことになります。こうしてフランク・ロイド・ライトの仕事をやりながら、自分でも少しずつ仕事を得て、設計をして、建築を造るということを始めていきます。

初期の作品、これは今は星葉科大学になっています星製菓商業学校の校舎です。先ほどお見せしましたチェコ・キュビズムの建築と通ずる幾何学的な結晶のような形を天井に用いた、コンクリート造の建築です。ここでも、現場で一生懸命足場を組む職人さんと話し合っている写真をわざわざ残しています。

それから、個人の住宅です。これは、三井の要職を務めた福井菊三郎という人の自邸ですが、このようなものを作っています。この時点では、まだフランク・ロイド・ライトの影響が非常に色濃いといえます。彼自身も、フランク・ロイド・ライトの影響から脱却するのに非常に苦労したと言っています。当初はライト風の建築を手掛けていた。それでレーモンドの名が通ったところもあつたりもしたはずですが。

初期のレーモンドの建築の仕事で大きなものはこれです。杉並区にあります東京女子大学です。一部は取り壊されてなくなりましたが、中心的な建物は残っています。これはライシャワー館という建築です。見てのとおり、ここにもフランク・ロイド・ライトの初期の建築の要素がまだ見えます。それから図書館です。こういう建築を造っています。この東京女子大の仕事は非常に長いタイム・スパンで関わりがありました。最終的には一九三〇年代に鉄筋コンクリートのチャペルを造ります。彼はライト風からの脱却を一生懸命模索していたわけですが、その過程で、オーギュスト・ペレ (Auguste Perret 一八七四―一九五四) という、フランスの、特にコンク

リート建築で有名であった建築家の作品にモデルを求めて、このチャペルを造っています。

このように、ライト風もあればベレもあり、後にはル・コルビュジエとか、いろいろな建築の影響をダイレクトに受けています。もつと行ってしまうと、かなりコピーに近いような形でデザインを参照しながら建築を造っている側面もあって、それを揶揄する向きもあるのですが、やはりフランク・ロイド・ライトの建築の影響が非常に強かった。そこから、そうではないもの、ライト風の平たいものではない建築を造る上で、もがいていた時代のレームอนด์の姿というのが、こういうところに見えているのかなと思います。

関東大震災と戦前日本での活躍

そうこうしているうちに、関東大震災に直面します。一九二三年です。この関東大震災によって、日本の建築界は大きく変わっていきます。それ以前は、木造建築が火事に弱いということもあって、そうではない耐火建築としてレンガ造を導入していくということが明治以来行われてきたのですが、レンガ造は地震に弱いということが露呈します。では、どうするのか。それでいよいよ鉄筋コンクリート建築の時代に入ります。レームอนด์は実際にプーラハ工科大学の時代から鉄筋コンクリートの建築を学んでいますし、キャス・ギルバートの事務所でも実践の経験がありますので、いよいよ彼の活躍の舞台が整っていくわけです。

早速彼が造ったものが、一九二四年、ちょうど関東大震災の翌年に竣工しました東京霊南坂の自邸です。この写真は象徴的で、手前にレンガ造の建築が崩壊して廢墟になっていて、その向こうにコンクリートの建築が屹然と建っているわけですが、このとおり、この建築は非常にエポックメイキングな、歴史的にかなり重要な建築です。

重要な点の一つは、今言いましたコンクリート造の出現というのを、顕著な形で日本に示した点です。この建物はコンクリート打ちっ放しです。白黒写真なので分かりにくいですが、いわゆるコンクリートの肌の色がそのまま出ているような建築です。そういう建築というのは、今でこそ時々みられるようになっていますが、当時は誰も想像すらしない建築です。次に、外観は、屋根が三角ではなくて、幾何学的なブロックのようなものが組み合わされた立体造形のような、アーティスティックな建築です。こういったものが突如、一九二四年の東京に現れたわけです。インテリアも、吹き抜け空間があったり、造り付けの暖炉なども、左右非対称の空間の流れの中にうまく位置付けられています。当然、家具やこういったものは全て、レーモンドとノエミがデザインをしたものです。

このころの建築の状況を、ヨーロッパも含めて見ていきます。当時はオランダが、第一次世界大戦に参戦しなかったということもあって、デザインの最先端だったのです。例えば、これは J.P. アウト (Jacobus Johannes Pieter Oud, 一八九〇～一九六三) というオランダの建築家の工場計画案です。この部分などにライト風の意匠が見られます。あるいは、ここもそうです。フランク・ロイド・ライトの建築は、ヨーロッパの新しい建築家にも非常に大きな影響を及ぼしました。実例からいえば一九一九年とか一九二三年あたりのことです。それに前後して、デザインという運動がオランダのロッテルダムなどを中心に起きて、より還元主義的な、幾何学的な形態の構成だけで、哲学的に造っていくような建築が実現するようになります。その例はシュレーダー邸です。こういうものができて、いよいよモダニズムというものが加速していくわけですが、この作品が出現するのが、ちょうど一九二二年から一九二四年です。当時の本当に最先端、超アバンギャルドな作品ですが、これと先ほどのレーモンドの自邸は同じ年なのです。

ということは、日本の建築のモダニズムの状況というのは、この時点でレーモンドを介して世界の最先端とほと

んど同期していたということ。これは驚くべきことです。幕末・維新前後からようやく本格的にヨーロッパの建築を知った国が、たかだか四〇年弱でここまで来ていたということ。もちろん、レーモンドを介してですから、単純に日本人の業績ではないという話ですが、それにしてもこの時点でこういう建築が実現していたということとは本当に驚くべきことだと思います。まずこの意味で、レーモンドが日本の建築の近代化に果たした役割は大きい。この靈南坂の自邸は、もう失われてしまいました。歴史的に非常に重要な建築です。

もう少し時代を下っていきますと、ヨーロッパには一九二〇年代の中期以降、ル・コルビュジエ (Le Corbusier, 一八八七―一九六五) というスターが出てきます。彼は、もちろん造形家として非常に優れていたのですが、理論家としても非常に優れた建築家です。彼は「近代建築の五原則」を提唱します。(1) 屋上庭園や、(2) ピロティイといって地面から建つのではなくて柱のうえに宙に浮いたような建て方、(3) 自由な立面といて、建築の構造に建物の外観が縛られる必要はないということ。あるいは、(4) 間取りそのものも構造体に縛られる必要はない、と考えます。そして過去の建築との違いを端的に示す(5) 横長連続窓というのを採用します。

この写真にあります横長連続窓は、今われわれから見ると、別に変わったことではないのですが、それまでのヨーロッパの建築の常識からすれば、おおよそ常識外れです。なぜかという、レンガや石で壁を積んでいけば、その間に窓を造るとすると、どうしたって縦長の窓しか造れません。レンガ造でこれは絶対にできませんよね。なぜこれができるかという、これはいわゆるカーテン・ウォール、すなわち柱から壁が遊離しているからなのです。

図で描きますとこうなります。昔の建築というのは、荷重を支える壁がつながっていて、窓は構造体を損なわない程度に開けていくしかない。前から見るとこうなるわけです。そうではなくて、壁を荷重を支える柱から別にすれば、好きなだけ窓を開けられますよ、とル・コルビュジエは言い出したわけです。それによって建築が一気に自

由になり、世界の建築が変わっていきます。これはル・コルビュジエの初期の作品です。横長窓で、こういう吹き抜けを取ったり、あるいは、もう家全体が宙に浮いてしまって、家の中に庭があるような建築を造っています。このようなものを一九二〇年代後半に、ル・コルビュジエは次々と造っていつて、これらを通して一気に近代建築が理論化されていくわけです。

レーモンドは、ル・コルビュジエにかなりダイレクトに影響を受けて、作風を変えていきます。先ほどの霊南坂の家を境目に一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、横長連続窓など、まさにル・コルビュジエのデザインの要素を使って建築を造っています。特にこのころは、その傾向が強いです。

ただ、面白いところがあって、プランなどは、敷地の形に合わせて途中でカギ型に曲げたり、敷地エントランスのほうの壁はちよつと丸めて、象徴的な出口を造ったり、必ずしも全てル・コルビュジエの理論どおりにやっているわけではないのです。内装は、やはりノエミが担当しています。ちなみに、この赤星家というのはレーモンドの一大施主で、銀行の経営などをした実業家の一族です。とくに赤星六郎という人は日本のゴルフ選手権の初代チャンピオンなのですが、そんなご縁からレーモンドはゴルフクラブの建物も設計しています。これも先ほどのル・コルビュジエの影響が非常に強い建築です。レーモンドは、こういうものを一九三〇年代に次々と造っていきますが、これも、ほぼリアルタイムです。彼は日本に最先端の建築を実現していくわけです。

一方でレーモンドはいろいろな建築を造っています。例えばこういう社屋です。一九二三年の作品ですがデザインとしてはちよつと古い感じ。こういうものや社宅、これも全部レーモンドがやっています。アメリカカ仕込みということもありますから、産業建築はお手の物で、どんどん、どんどん造っていきます。これがレーモンドの面白いところで、鉄筋コンクリートで産業建築も造るし、大きな建築も造るし、あるいは超モダンな住宅を造るわけです

が、一方で、フランク・ロイド・ライトの初期のプレイリー・スタイルの流れの木造建築も、レーモンドはずっと力を入れて造っていきます。古いものでは、ポール・クロードルというフランス大使だった人の自邸を初期に造っています。あるいは先ほどの赤星四郎さんの別邸では、日本の数寄屋建築に近い、民家風のもを造っています。家具は全部ノエミ・レーモンドですが、こういうものを造ってみたいしています。この建物はいかにも日本風にするかもしれませんが、より面白いのは、例えばトレドソンというスウェーデン人のビジネスマンの別荘で、左右対称の建築の真ん中に、コンクリートで暖炉を黒い溶岩を使って造って、両側に非常に大きな間口の窓を空けて開放的な家を造っています。

こうした作品は、後にお話をしますが、レーモンドの一番彼らしい主義主張につながってくるものです。リージョナリズム、日本語では地域主義という言葉が一番いいでしょうか。これも、世界でも同期する動きがあります。

代表的なのは、アルヴァ・アアルト (Alvar Aalto, 一八九八〜一九七六) というフィンランドの建築家です。彼は、フィンランドの風土に合った建築を造っています。寒いですから窓が小さく、ル・コルビュジエの作品のように大きく窓が開いているようなものではありません。あるいは、アアルトはフィンランドの主要な建材である木を使って、木造建築としてモダニズムの建築を豊かにし、自分たちらしい建築にしていこうと試みます。レーモンドの試みは、こういった動向と時代的にもかなり近いものです。

このリージョナリズムの動きに、近代主義の権化のようなル・コルビュジエも、早晚気が付いていきます。やはり教条的でインターナショナルなモダニズム建築を造るだけでは良くないということ、一九三〇年代ぐらいになると、新たな傾向の建築を造り始めます。木造でやったり、地元石を使ったり、あるいは、フランス語でベトン・ブルットという、コンクリートをきれいに仕上げるのではなく、荒々しく打ちっぱなしにしたり、表面を叩いて表

情を付けてみたり、いろいろなことをします。

これは実現しなかったのですが、ル・コルビュジエはエラズリス邸という、南米チリのワイナリーの農園主の家の設計案です。その少し後に、レーモンドが自分の軽井沢の夏の家を木造で造るのですが、主屋の部分の、楯が真ん中に集まるようなバタフライ屋根は、それこそダイレクトに影響を受けているところがあります。

レーモンドのこの作品が発表されたときには、さすがにル・コルビュジエも「よく勉強してくれて、私の建築を見てくれて嬉しいけれど、いくら何でも似すぎではないませんか」ということで、応酬があつたといえます。確かに同じ系統のデザインの流れにあつたのですが、レーモンドの家は純粹な木造で、内部はいわゆる山小屋風の木造ということであつて、レーモンドはレーモンドなりに、ル・コルビュジエのアイデアを生かしながら造つたようです。二人はその先、険悪にはならなかつたのですが、レーモンドには、そういうところ、いろいろな先進的な建築を、真似しながら造つていくところがあるのです。しかし彼は日本にいましたから、わざわざ取り寄せた洋書の建築雑誌などを通してル・コルビュジエを見たり、オーギュスト・ペレを見たりしていたわけです。ヨーロッパにいて真似をしているというのとは、違う状況での話だつたとは思いません。

今までご覧になつてお分かりのとおり、随分と作品のスタイルも変わってきています。一生懸命、時代の最先端に食い付いていつている様子がよく分かります。これが、レーモンドのレーモンドたる所以。プラハを決死の思いで出てアメリカに渡り、未知の国日本に来たわけですから必死だつたわけです。日本という新興国で、いい施主をつかんで建築を造れるチャンスがあれば、あらゆる方法を駆使し、世界の潮流に付いていこうとしていた、そういうレーモンドの姿勢がよく分かります。

戦前の一歩ピークだつたころのレーモンド事務所のスタッフは、こんなメンバーです。アントニン・レーモンド

がいて、ノエミがいて、その横で、厳つい顔をしているのが、後に東京芸大の教授になる吉村順三（一九〇八—一九九七）です。左側の、柔和に笑っているのは、前川國男（一九〇五—一九八六）という建築家です。彼は実際にル・コルビュジェの事務所働いて帰ってきた人です。このようなメンバーでやっていたレーモンド事務所は当時、日本で最も力のある設計事務所のひとつだったのです。

出版物も出版してしまして、アントニン・レーモンド作品集や詳細図集を一九三〇年代に出版しています。これはアメリカでも出版され、アメリカの建築界でもレーモンドの名前は知られていくことになります。詳細図集の自身を見ますと、日本建築の土壁のディテールを写したりしています。決して自分が設計したものだけではなく、日本建築の特徴的な部分もこの図集には入っていて、それがアメリカに流通していくことになるわけです。皆さんのお手元にお配りしている南山大学の設計趣旨でも、レーモンドは日本建築の伝統や、日本建築らしさを学んだということを書いてあります。その学んだものを自分の設計に還元したいという思いを強調して語っています。これもある意味、彼の戦略と言えば戦略です。世界の中のデザインの流れの中で、他にはない自分の立場を造るうえで、日本建築から得られるインスピレーションというのは非常に大きな武器になると考えたと思います。

離日、第二次世界大戦

戦時体制が近付いてきまして、彼は日本にいられなくなっていきます。まず最初に一九三八年に一度出国し、インド、正確にはフランス領ボンデイシェリというところに行きまして、そこでカトリック系の修道院の宿舎を造ります。この建築は、南山大学の建築に通じる萌芽が見られる建築で、興味深いものです。一階はピロティで高くな

っていて、廊下の部分が少し張り出しています。そこにコンクリート製のルーバー、日よけが付いていて、ちょうど風がうまく通るような位置に開口部を取っています。内部はこんな感じですが、内壁は木造で、繊細な細工の入った壁になっています。このあたりの雰囲気などは、南山大学の事務棟に通底するものがあるように思います。屋根も、コンクリートのシェル構造といいまして、それ自体が構造体として成り立つような屋根を重ねていますが、これも南山大学の講義棟や、昔の学生会館の屋根にも見られます。

このように南山大学につながるような要素があるわけですが、これらは彼がインドに行って考えたことです。暑熱を避けるためには風を何とか取り入れなければいけない。けれども、風を取ろうと思っただけで開口を大きくすると、日差しが入って、これはまた暑い。そういう条件を全て解決しながら建築として環境を整えていくための工夫が、そういう形になっていったのです。このあたりから、単にル・コルビュジエの形だとか、オーギュスト・ペレのデザインというのではなく、彼自身が敷地の環境とか気候といったものを見ながらデザインを選んでいく、ということの重要性に気付いていきます。

その後レーモンドはアメリカに帰り、ニュー・ヨークのロックフェラー・センターで展覧会をします。あまり評判が良くなかったと本人は書いているのですが、日本で造ったもの、インドで造ったものがアメリカで紹介されて、レーモンドの存在はアメリカの建築界でも知られていきます。アメリカの主要な大学、マサチューセッツ工科大学やプリンストン大学、イェール大学などのほか、ミネソタ大学や地方の私立大学などでも巡回講演をして、自分の建築をアメリカで紹介していきます。

最終的に、日本が戦争に突入するに至り、アメリカに拠点を移します。一九三九年、ペンシルバニア州ニュー・ホープというところに農園兼スタジオ兼住居を造って、ここを拠点に建築を造るということを始めます。フランク・

ロイド・ライトのタリアセンの影響も感じられますが、ここで彼が関心を持ち始めていた地域主義の建築というものを本格的に模索します。これはニュー・ホープでの生活風景の写真です。真ん中に写っている日本人は吉村順三です。吉村は戦時下にもかかわらず、アメリカに渡ってニュー・ホープで修行をしていたのですね。こんなふうに見習いの若手と一緒に共同生活をしていたわけです。納屋を改修したり、あるいは一階部分がスタジオになっている建築家たちが設計をし、本人たちや所員たちは上階で暮らす。そのような建物を建てます。そのころの作品は、このようなものです。石積みらしい納屋風のもので、先ほど見た納屋もそうですが、こういった素材、それと木材、地域との関係の非常に深い建築素材を使った建築を造っています。あるいは、海に面した丘の上の敷地に風を受け止めるような壁を造って、桂離宮の月見台に影響を受けたという話もありますが、こういうバルコニーを出して、海の風景を楽しめるような建築を造りました。以前に日本で造っていたようなインター・ナショナルなモダニズムの影響が非常に強い建築から、ずいぶんと離れてきていることが分かります。

そのうちアメリカも戦争体制に入ってきましたので、彼のような有能な技術者は、米軍キャンプの計画などに徴集されていきます。レーモンドはこれらも一挙に手がけます。一番の問題はこれです。このお話をご存じの方もあってもかもしれません。レーモンドが日本に居たということは、当然アメリカ軍も把握していました、「ちよつとレーモンドくん、来てください」ということで、「何でしようか」と聞くと、効率良く、あまり費用を掛けずに効果を出したいと。何のことかという、爆弾のことでした。オイルの入った焼夷弾を実験するのに、日本の都市は実際どうなっているのかということで、彼は知恵を出さざるを得ないはめになる。こうして実験住宅を造って焼夷弾の効果を試すというプロジェクトに参画させられるわけです。

彼は自伝にこの話を書いています。もちろん、いろいろな思いがあったと思うのですが、戦後になってレーモン

ドが日本で活躍したときに、何かというところの話が出てきて、バッティングされたりということもありました。生まれてからこれまで、華々しく活躍した側面もあった一方、常に厳しい選択をせざるを得ない人生だったということです。

戦後日本の再建

終戦後、彼は、いの一に日本に帰ってきます。最初に帰ってきたときは、建築家としてではなくて、あるガムの調査をするための技術者として、日本に帰ってきます。自分の職能とはあまり関係のない仕事なのですが、とにかくにも参画して日本に帰ってくるわけです。東京に着いてみると、自分のいた麻布の丘あたりから国会議事堂を見ればこのような風景、町は焼け野原ということで、ショックを受けるわけです。そして、その後は日本で自分の最後の仕事をしていこうと決意します。

早晩、一九四八年から、アメリカ資本のリーダーズ・ダイジェスト社という新聞社の本社を造ります。これは竹橋の、今は毎日新聞社の本社が建っているところにありました。この建築は日本に建った戦後初期の作品ということもあります。内容的にも非常に重要な作品です。

この建築は、やじろべえ型の鉄筋コンクリートの構造体と、鉄骨造のつかえ棒のようなもので支たハイブリッド構造で成り立っています。単純な鉄筋コンクリート構造ではないのです。その構造体にインドで実践してきたブリーズ・ソレイユという日よけを付け、中に鉄骨のサッシを入れてというように、鉄とコンクリートをうまく組み合わせ、今までにない、非常に洗練された建築を造ったのです。アメリカでの経験、インドでの経験といったも

のが加わって、いよいよレーモンドらしい、彼オリジナルの建築がこのあたりからできてくるわけです。しかしこの建物は早々に壊されてしまいます。興味のある方は当時の記事を読んでいただければと思うのですが、この建築を壊すか残すかということで、建築界で随分議論がありました。先ほどの焼夷弾の話など、いろいろなことが取り沙汰され、なかには誹謗中傷もあるように見えます。ともあれ、この建築は実現したのですがすぐになくなってしまいました。

ですが、ここで見ていただいたとおり、建築の構造体、ここにこそデザインの本質があるのではないかということにレーモンドはいよいよ思い至りまして、これは彼のポリシーの一つになっていくわけです。その後、一九五〇年代、六〇年代になると、レーモンドは、ヴァルター・グロピウスというドイツ人のパウハウスの建築家と対談したり、あるいは丹下健三と対談したりと、日本の建築界において、自分が歩んできた日本の近代建築の歩みを次世代に伝えていくような役割も担っていきます。

建築家の集大成

そういう中で最終的な、集大成といえる建築がいくつか完成します。これは東京の目黒にあります聖アンセルモ教会堂です。コンクリートの打ちっ放しに、日よけがあつて、非常に美しい建築です。単廊ですが真ん中に通路がある、従来のなカトリックの教会の形をしています。清新な作品です。このレリーフもノエミの作品です。こちらは群馬・高崎の音楽センターです。ここでは、コンクリートの折板、折り紙のように折った形の構造体を重ねて、こんな間取り、こんな断面の、怪物モスラみたいな形をしているのですが、ちょうどその間のスリットのところか

ら光を採って天井に配るといふ、まさに構造そのものがデザイン、それ以外の装飾はないというように、建築デザインがどんどんと研ぎ澄まされていきます。そこに彼自身が手掛けたレリーフ、絵が描かれたりしています。あるいは、アクセントになる階段などには、非常にマッシブな造形が出てきています。これなどは南山大学の校舎にも同じようなものがあります。

そういう中で、いよいよ神言神学院の建物、新しい間取りの開かれた教会堂の形に変わっていますが、こここういうヴォールトのコンクリートの屋根が付いてくるような空間とか、南山大学の建物ができていくわけです。ご覧いただいたとおり、この南山大学の建物というのはレーモンドの作品の、まさに集大成に当たるものです。

この建物を造っているころのアトリエは、麻布に造っています。これは非常にコンパクトというか単純な屋根、こういう重なつた屋根をずっと繰り返した、本当に簡素な建築です。そこに所員がいて、自分たちもそういうところ、ちょっとしたパティオで朝ご飯を食べたりしていました。まさに質素で経済的で、単純で、構造体が一番魅力のある建築、そういう、レーモンドの原則がこのあたりによく現れています。

南山大学キャンパスの特徴 — 比較考察から —

今までずっとお話しした中で、レーモンドという建築家はどのようにして自分のデザインのスタイルを確立していったか、あるいは、その中で南山大学はどういう位置付けにあるのかということをご理解いただけたかと思います。最後に、名古屋大学とか、愛知県立芸術大学という同じ都市、同じ年代のキャンパスの建築と比べて、レーモンドの建築の特徴をより明確にしたいと思います。

南山大学も名古屋大学も、八事の丘を区画整理した上にできたキャンパスです。南山のキャンパスは、自然を大事にした建築だと言われていますが、実際には、敷地は既に住宅地として開発されています。その中で残された土地の特性をレーモンドが読み取ってデザインをしてみたものです。

一方、名古屋大学では、豊田講堂という建築を、横文彦という建築家が一九六〇年に設計しました。レーモンドがまさに人生の集大成として南山大学を造ったのと正反対で、ここを設計した横文彦は若干三九歳、まだ全然若いころ、もっといえば、まだ半分学生のような身分、彼はハーバード大学で勉強していて奨学金を得て世界旅行をしていた途中で設計した建物です。

この建築は、レーモンドの建築に比べると大きく違う部分があります。構造的にはメガストラクチャーと言ったりするのですが、ここにありますが黒いコの字型のものが柱、大階段がある床下の部分に、巨大なコンクリートの梁があります。要は、この巨大なフレームが主な骨組みになっていて、正面の細い柱は、鉛直荷重を受けているだけで、地震に耐える役割は果たしていません。そういう構造的に非常に斬新なことをやって、建物全体を広場のように開放的につくったのが豊田講堂の特徴です（写真3）。

こちらは愛知県立芸術大学で、一九六六年、レーモンドの南山大学の二年後にできたキャンパスです。お弟子さんの吉村順三の設計です。ここには、見てのと



写真4 愛知県立芸術大学講義棟(手前上部)と美術学部棟(奥)



写真3 名古屋大学豊田講堂



写真5 竣工当初の南山大学山里キャンパス

おり非常に多様な建築があります。こういう細長いものもあれば、絵画をやるアトリエなので北側に採光のための高い窓がある建物、あるいは折板構造の音楽堂など、さまざまな建築があります。それを構成して、お互いの距離感を上手に保ちながら、どこを切り取っても絵になるようなキャンパスを造っているわけです。吉村はレーモンドのお弟子さんですが、随分テイストが違うということが分かります。音楽や絵画を学ぶ学校ですから、建物の用途が特殊だということがある。そこで吉村はあえてそれを建築の形として表現したのです（写真4）。

これらに対してレーモンドの建築はどうでしょうか。もちろん、建物の機能は建築の形に現れています。例えば講義室の形に現れたり、屋根に現れたりという面はあります。ですが、お配りしている文章の中にもあるとおり、レーモンドは、単純な構造ということを強調しています。決して豊田講堂のような大げさなことはせず、あるいは愛知県立芸術大学のようにいろいろなこととせず、全ての建物をごく普通のラーメン構造^③によって、経済的な合理性のある柱の間隔で造っています。講義棟も一見形は変わっていますが決して無理な構造をしていません。等間隔に一般的なサイズの柱があります。建築を普通に造って、それを共通のデザイン要素としてキャンパス全体を造っています（写真5）。これはとても重要な点です。これはレーモンドの南山大学の建築の、一つの大きな特徴です。

もう一つの特徴はこの風景に表れています。竣工当時から時間がた



写真6 建物の中の木々

って、現在ではこうなっているわけですが、建築の間に緑が生い茂ってきています（写真6）。実際見て回ると、ほとんど建築が見えないぐらい鬱蒼と木が生えているという、非常に豊かな空間です。足元には枯葉が落ちて、枯葉を掻き分けると粘土の地山が出てきます。私はこういうところでカブトムシを捕ったりしていましたので、この森のことはよく知っていますが、南山大学のキャンパスといえ、この森です。

実はこれは全部、当初の竣工写真で見ていただいたとおり、もともとは、はげ山だったところに生えてきた木々です。もちろん、植えている部分も若干ありますが、多くは二次的にできてきた森です。そういう森を抱きかかえながら、建築が山に建っています。どこを見ても、建築と建築の間に木があつて、ちょうど今の季節は紅葉が非常に美しい。これはまさにすばらしい南山大学の特徴です。

次に建築を中まで見ていきますと、もう一つ大事な特徴、こういうった内装や家具などのインテリア・デザイン、に気づきます（写真7）。家具とか床とか、こういうったものがレーモンドの作品の重要な部分でもあります。特に家具などはノエミが、一生懸命いろいろデザインして造っています。もちろん、なんといっても南山大学のキャンパスは、レーモンドが最初に敷地を訪れたときに敷地の特性を読み取って、南北の尾根にへばりつくような建築を構想し、図面にも丘の上のずっと建築が配置されたのです。ですが、その他にも、このようにレーモンドらしい考

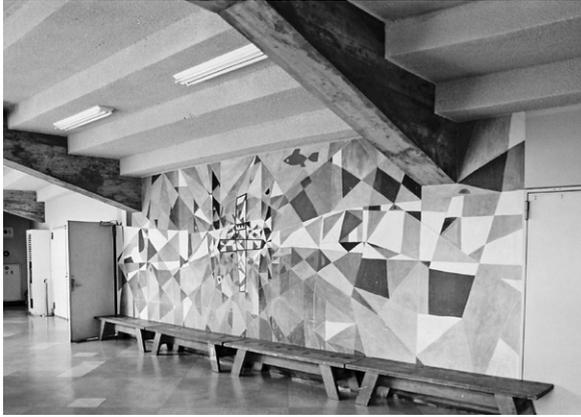


写真7 講義棟の内部

えが反映されているわけです。

お手元にお配りした文章から抜粋しますと、こういうことです。これは五原則としてアーカイブの展示でも紹介されてきましたが、まずは人間的な尺度であるということです。決して大々的な、大きなモニュメンタルなものではなく、ごく普通の機能的なサイズで建築を造るということです。それから、単純、あるいは直接的に造るということ。高崎の音楽ホールなどがその典型で、構造的なデザインがそのまま建築の特徴になっています。そして、経済的であるということです。このあたりがレーモンドらしい境地といえます。南山のキャンパスは非常に大きなプロジェクトで、たくさん建築がありますが、先ほどの他の例と比べてみてお分かりのとおり、この考えを基礎として、無理なく実現されています。それから、最後に、彼は土地ならではの特性、地域主義の考えと重なるわけですが、敷地の高低差とか不均整さ、自然の地形ならではの特性を生かして、「あたかも地面にしっかりと根を下ろした植物が枝を張るように、この敷地には地面から建築が自然に育ち広がっているような状態がふさわしい」と言ったのです。

このようにレーモンドはこの南山大学のキャンパスを考えたわけですが、キャンパスの設計で考えたことそのものが、実はレーモンドの建築論、レーモンドのデザインの主義そのものなのです。このことは南山大学のキャンパスの価値を考えるうえで本当に大事なことなので



写真8 新棟と木々

す。私がこのキャンパスこそレーモンド建築の集大成だと言うのは、そういう意味においてです。

それは決して個々の建築の集合体、バラバラに建った建物の群れではなく、尾根筋の両側の建築はあたかも一つの有機体のように、全てが統一された尺度で、一体的に結び付けられています。たとえ増築したり、建物が増えたり、いろいろなことがあっても、無理せずごく普通に建てていけば、ごく普通にまともっていくということも、考えて造られているのです。

実際に近年、新しい建物が建ってきています。今私がお話している、この建物もそうですし、ちよつと前の工事ですが、丸紅の旧社宅の敷地にも建築が造られました。そこでは、建物の色やデザインを合わせ、間に木々を植えていただいたりして、全体に新しいキャンパスも古いキャンパスとうまくマッチして、レーモンドが考えていたように、特殊なことをせずとも自然にキャンパスが調和しながら広がっていくことが、実証されているのかなと思います。正直申し上げると、地面をちよつと削りすぎかな、レーモンドの考えに照らすと、少し大地を触りすぎかなとは思いますが、細かく見ていくと、新しい建物でも、こういうちよつとした隙間に木を植えてあつたりします（写真8）。これが大きくなれば、このように保存されている樹木とともに並木になって、いい緑になるのではないかと思います。おそらく自然に生えてきた木でしょうが、こういう大きな木が保存されていたり、新しく植えら

れている木もあります。もう一言申し上げると、何で全部シマトネリコなのか、もう少し地山になじむ木を植えてほしかったなと思ったりしますが、新たな緑が生まれて、だんだん生えてくればいいのではないかと思います。新しく建てている建物の横にも、このように一本、二本でも木が残されていけば、レーモンドが思っていたことも踏襲されてくるのかなと思います。これも昨日撮った写真です。どんどん新しくなって、リニューアルされて、きつと活気のあるキャンパスになると思います。レーモンドが造ってきたものをうまく次世代に伝えながら、皆さんの誇りになっていくようなキャンパスになることを期待しています。

私は南山大学の構成員ではありませんが、最初にお話ししたとおり、非常に大きな思い入れがありますので、キャンパスの成長を拝見しに、またここに来られれば良いなと思っています。

これにて私の発表は終わりにいたします。

(終了)

註

- (1) Catherine Compain Gajac (dir.), *Les campus universitaires 1945-1975 - Architecture et Urbanisme, Histoire et Sociologie, État des lieux et Perspectives -*, *Cahier de art*, No.7, Presses Universitaires de Perpignan, 2014
- (2) William Whitaker and Kurt Helfrich, *Crafting a Modern World: The Architecture of Antonin and Noemi Raymond*, Princeton Architectural Press, 2006
- (3) 柱と梁を剛接合して骨組みを構成した構造形式